

招く 通信

2020
6月号
No.14

厚生労働省
モデル事業
報告
特別号



今こそ、「隣人時代」の幕開け。

❖ 理事長メッセージ ④ 社会福祉法人拓く 理事長 馬場 篤子

2020年、新型コロナウイルス感染症は、人類にとって歴史的な危機。大きく言えば、どう乗り越えていけるのか、その鍵は、世界中の人たちの連帯にあると思います。2011年3月11日の東北大震災。わたしは、その2週間後に被災地に到着。ライフライン停止の上に震度4から5の余震の連続、放射能汚染が騒がれるさ中、介護福祉士や医師、看護師らが、危険をかえりみずに、全国から次々に駆けつけていました。誰かが指示を出すわけではないので、自分たちで話し合い、知恵と力とお金も出し合い、全力で避難所の方々の支援をしました。

偶然出会った他人同士でしたが、信頼関係を築きながら支え合い、傷ついている人を本気でケアしたという実体験。そして、何よりも「人間、捨てたもんじゃない」というポジティブ思考は、その後、安武町において、グループホーム「三原さん家」を拠点とする地域食堂や子ども食堂の開設

などを推進する原動力に。そして、2017年、地域活性化を目指して、多くの地域の方々と一般社団法人「ほんによかね会」を設立しました。まさに、「人」「物」「金」をもつ、力強い「プラットフォーム」の形成です。そんな中、新型コロナウイルス感染防止によって、久留米市立学校は3月9日より修了式まで臨時休校に。そこで、子ども食堂を行う有志と同会が集まり、急きょ、安武小学校と協力し、子どもたちに学習支援の場と昼食を提供。その後も、「感染対策として接触しないのが最善策」と言われる中であっても、孤立やDV、児童虐待を少しでも防ぐために、弁当づくりでの支援など、日々力を合わせて前に進んでいます。

この危機のときにこそ、多様な世界の人々に共感し、心を寄せながら、力を合わせていこうとする「利他主義」の風を起こしていけば、必ず乗り越えられると思います。まさに、「隣人に共感し、共に生き抜く」時代の幕開けです。

(写真) 昼食提供 3月9日～3月24日 学習支援の大学生と一緒に昼食

❖ CONTENTS	特集「隣人時代」	● ラッキー ループ (一社)ほんによかね会	2・3
		● ローカル ログイン 久留米10万人女子会・本業+α・輪をつくろう	4～6
		● 官民協働	7
		● 第18回ポレポレ祭り報告	8

地域食堂(左:三原さん)

ラッキーloopー広がる、幸福の輪。 (一社)ほんによかね会

Lucky loop

少子高齢化により経済が縮小、税金などが減少する中、住民ができることは、普段から支え合う循環をつくっておくこと。私たちは、それを「ラッキー ループ (lucky loop)」と呼んでいます。

2010年、当法人は「農業振興の役に立ちたい」と、「安武そら豆復興作戦」に着手し、改めて安武町の地域資源に着目しました。2016年、任意団体「安武ほんによかね会」を設立し、翌年に一般社団法人化。

3年間の厚生労働省モデル事業に取り組みました。

そして2019年11月、同会の役員改選。

「あの人を誘ってみたら」と声を掛け合ったことで、町内で縁が回り回って、若い二人の住民が理事として加入しました。

この地で、明日への希望と活力が生まれ、幸福の輪が広がっています。



直売所レジにて(左から) 野間口さん・廣松さん



JAぐるめ安武農産物直売所「そらまめ」

3月「新型コロナ」で臨時休校。 「子ども食堂」を支援。

3月9日～24日、安武小学校で「安武子ども食堂」が臨時開設され、同会の会員らが協力。「おいしいね?」「うん」と子どもらの笑顔。地域の底力を発揮できました。(表紙にて紹介)



4年の積み重ねで、大家族のように。

(一社) ほんによかね会 直売所部長 野間口 保之

任意団体の頃から4年目の今、JAくめ安武農産物直売所「そらまめ」を拠点に老若男女のボランティア会員が、それぞれの持ち場で一生懸命頑張っています。食堂部門は中高年の男性による「出来たて屋」も加わり、週3~4回の地域食堂を開店。販売部門では、毎週土曜日に農作物などを販売。品数も揃って充実してきました。小学4年の子どもを育てるお母さん方が交代でレジを担当し、65歳から80歳のベテラン生産者や高齢者が準備や片付けをしています。

活動を応援しようと来客数も増えています。大半が常連さんなので、姿がないと安否を気遣って電話したり、弁当を届けたり、おぼつかない足取りの人は車で送迎したりと、自然な支え合いが生まれて、まるで大家族のようです。これからも、地域の活性化と健康で楽しい町づくりに向かって頑張りたいと思います。

実家みたいな場所ができた！

(一社) ほんによかね会 廣松 麻奈美

私は4人の子育て真っ只中の母親です。直売所「そらまめ」でボランティアを始めて2年経ちました。人と接することが苦手で、自分から進んで地域のために何かしたいと考える方ではありませんが、3年前に厚労省モデル事業のママチャレプロジェクトに参加したことがきっかけで、地域の人たちと顔見知りになりました。

子育てをしていると毎日の些細なことで息詰まり、落ち込んでしまうことが多く、頭の中が子どものことで一杯に。でも、直売所のレジをしている間は、地域の方々が子どもと一緒に見守ってくださいます。縁もゆかりもない土地ですが、私にとって、家族にとって、直売所は実家にいるような、温かで安心できる居場所になったと感じます。子育て中の他のお母さんたちに、私が感じた素敵な居場所を広め伝え、足を運んでもらえるようにしていきたいです。

※…若い世代の地域デビューを促す試み

地縁、血縁なしですが、代表理事に就任！

(一社) ほんによかね会 代表理事 岩根 慎治

久留米に転勤し、安武町の保育園に子どもを通わせた際、園の保護者や地域の人たちが温かく迎え入れてくださったので、すぐ打ち解けることができました。日を追うごとに、高齢者と若者とが入り交じる住みよい町だと思いましたし、強い縁も感じましたので、熊本県出身の私と大阪出身の嫁、子ども4人、そして、大阪から嫁の両親にも来てもらい、安武町に家を建てて住むようになりました。

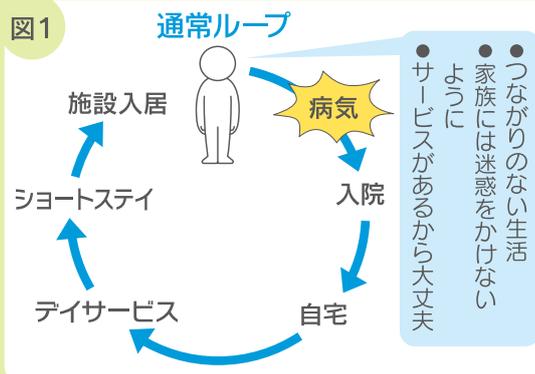
この町は、地域コミュニティの底力、自治力と、これからの可能性を秘めている。そう確信して、自分の働く「企業」と「住民力」とで、何かコラボできないかという考えが高まり、東京本社に相談して、「ほんによかね会」の代表理事を積極的に受けることにしました。超高齢化社会の今、地方のあり方の一つを、地域の人たちと一緒に描きたいと夢が膨らんでいます。

三原さんのラッキーloop

社会福祉法人拓く 本部長
浦川 直人

4年前に他界した私の祖母は、87歳まで戸畑で一人暮らし。交通事故の後遺症から不安になり、久留米に引っ越し同居しましたが、知らない土地で散歩程度の毎日。次第に足腰が弱くなり、家で塞ぎ込むようになりました。デイサービスを経て、特別養護老人ホームに入居。面会では、いつも「早く死んでもいい」と悲観していた姿が心に残っています。病气から施設入居へのloop(図1)は決して珍しいことではなく、周囲を見れば、同様のケースが多いのではないのでしょうか。

ところが、ほんによかね会の三原さん(84歳)は、違うloop(図2)です。地域食堂の朝、てきぱきと準備をし、お客さんへの細やかな気配りもこなします。ところが、83歳で胃がんが判明し全摘手術、食事が喉を通らず15Kgダウン。「三原さんを助けなきゃ」と日頃からお世話になっている知人たちが大勢駆け付けました。術後すぐ、拓くの「助け合う佐渡旅行」なら一緒に行けそうだと参加し、「人が喜んでくれる顔を見るのが一番」と、地域食堂にも復帰。「これが最高のリハビリよ」と素敵な笑顔を見せます。祖母には間に合いませんでしたが、60代後半の母たちが「ラッキーloop」の人生を送れるよう、ほんによかね会の活動を続けながら一緒に考えていきたいと思っています。





左・中村さん 右・國武さん

ローカル ログインー地域を意識し、踏み込む。

厚生労働省モデル事業の3年間、私達は、「ローカル ログイン(Local login)しよう」をテーマに、地域を意識し、一歩、また一歩、踏み込んでの活動を展開。

もっと、町内の住民と出会ってみる。課題があれば、みんなで考えてみる。

そう心に留めて、多くの人々と語り合いました。今回、3プロジェクトを紹介します。

久留米10万人女子会 (フェスティバル)開催
2020年2月、
新型コロナウイルスの
感染拡大防止のため、
オンライン配信に
変更して決行!

久留米10万人女子会 わたしのことは、わたし達のこと

久留米 10万人女子会 國武 ゆかり 中村 路子

「見たい景色を、わたし達で創る」

4年前、子育て世代の女性達が集まって、「100人女子会」「1000人女子会」を開催しました。その後、18年度より厚労省モデル事業に参画。市内の成人女性は約13万人、10年後にその全ての女性達がつながることができたら、どんな景色になるのだろうか。見てみたいと考え、「久留米10万人女子会」に改名しました。このまちで子育てを楽しみたい、夢を描いてみたい、色んな方と出会いたい。ひとりひとりの「興味」から始まる「地域暮らし」をみんなで意識し始める。そこから始めること。緩やかに優しく。それが、私達の考える「ローカル ログイン」。

そこで、校区毎に月1回集まり、暮らしや地域について考える、小さな女子会「地域暮らし研究ラボ会」を開催。今では46校区中21校区に拡大し、多世代の女性が集

まって、最近あった素敵なこと、こんな町にしたい、こんなことができたらいいな!と話合っています。自分達でマルシェを始めたり、校区の歴史を調べたり、校区行事に参加したり、自分達の住んでいる町に興味をもって行動に。「令和おもてなし列車」や「大人の恋列車」など、JR九州さんとのコラボも実施。つながりを深めて「楽しむ」機会をつくり、出会った人たちが少しずつ地域暮らしに目を向け始め、仲間が増えてきました。

2年間の活動を通して、掴んだ言葉は「わたしのことは、わたし達のこと」。障がい児者、母子家庭、不登校、孤立した子育ての現状などを知り、共感しながら、その先に見える、ワクワクした地域暮らしをみんなで創りたい。いつもより少し前に、2歩踏み込んで、「隣人時代」を目指したいと思います。



西原米店

大人は久留米餅、
子どもは駄菓子へ。
0歳児から高齢者まで
楽しめる
店づくりを展開。

「本業+α」の店



18年度・19年度参画

●小学校区毎に「ラボ会」開催(現在21校区)

●年に1回「10万人女子会(フェスティバル)」の開催

●企業コラボ企画・エリアマルシェ・講座・視察等





**上津校区
ラボ会**
オンラインで
活動を発表



**南薫校区
ラボ会**
暮らしや
地域について
考えている。

プラスアルファ 本業+α 久留米発!プラットフォーム

子ども大人プラットフォーム 村谷 純子 西原 健太

昼過ぎ、中央町の「あきない通り」にある久留米餅の店。「ただいま!」と、近所の子もたちがやってきて、すぐさま、駄菓子子の棚へ。「おかえりなさい」と出迎えるのは店主です。いつもと違う言動がないかと気を配りながら、挨拶や言葉遣い、ドアの開け閉め、片付け方も教えています。子どもも大人も気軽に立ち寄って、まるで第2の家のようなです。本業は餅屋さん、それにプラスして駄菓子屋さん。さらにプラスして、誰かのための「居場所」「相談場所」。そして、通りの店主たちと「あきない祭」を開催し、賑わいを呼び込んでいます。

私たちは、19年度の厚労省モデル事業において、このように多様な機能を備えた店舗を、「本業+α」(子ども大人プラットフォーム)と位置づけました。今や、SNSは飛躍的な進歩を遂げ、スマホがあれば人とつながることができます。しかし、だからこそ、子どもも大人も落ち込んだときにほっとできる、そんな手触り感のあるコミュニ

ティを求めているのです。

そこで、市内各所でヒアリング調査を実施。美容業や飲食業などを営む皆さんの個性豊かな「+&」と出会いました。パン・駄菓子屋さんは、子どもとご近所さんを見守り、からあげ屋さんは子育て中の母親たちを気遣い、交流の場を設けていました。その対応は相手目線で温かい。優しい声かけ、さりげなく悩みの相談に乗ったりするうちに、店が癒しの場や談話室に。まさに地域の小さな拠点(プラットフォーム)です。

今回の事業では、「本業+α」の10店舗を発掘。顔合わせをする中で、情報交換をしながら次の手立てを一緒に考えていこうと歩み始めました。「私にも何かができる」と同じ視点をもった店が、地域にもっとあるはず。私たちの願いは、久留米のまちにプラットフォームがたくさん誕生すること。多くの人と出会って、話をして、学び合っていきたいと思います。

※…2019年で10回目。毎年開催。久留米の未来を担う子どもたちに伝統を引き継ぎ、商いとお金の大切さを学んでもらうことを目的に実施。

DATA ●社会資源の発掘 ヒアリング調査を行い、市内にある「本業+α」を発掘
●ネットワーク会議の開催(8回開催)

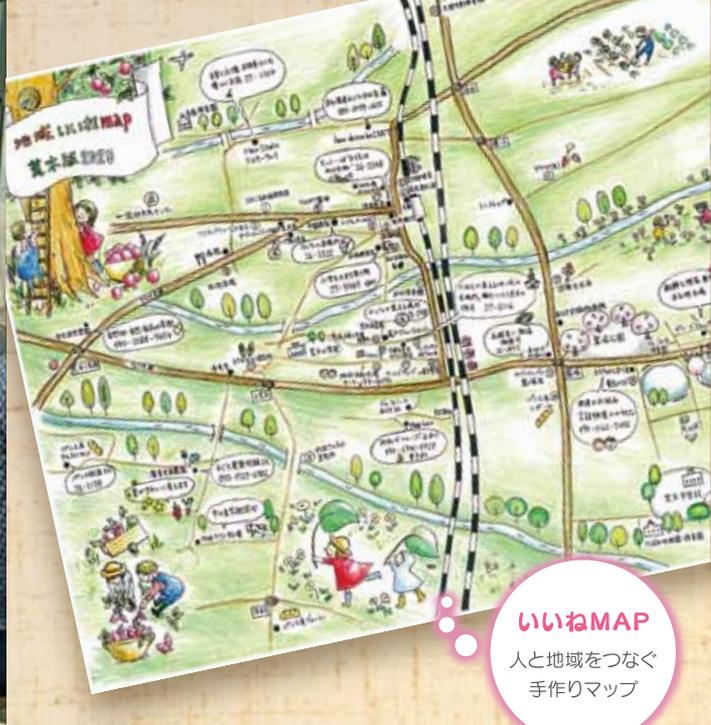
Local login



ネットワーク会議
本業+αの人たちと
行政が集い、
協議を重ねた。



いいねMAP
配布
昔から通っている
地域のなじみの
鮮魚店



いいねMAP
人と地域をつなぐ
手作りマップ

輪をつくろう 地域づくりの主体になる

輪をつくろう 藤野 薫 松野 友里

「地域いいねマップ。置いていただけませんか」

「輪をつくろう」の親子連れが、江南中校区のコンビニなどを訪れて、イラストマップを配布しています。食物アレルギー対応の惣菜店、障がい児が一人で通える理髪店など人に優しい店を発掘、手作りした地図です。

「うちは、車いす対応のトイレにしていますよ」

「そうですか。更新の時に掲載させてください」

同会は、障がいのある子どもと親、支援者の会です。17年度の厚労省モデル事業を機に、江南中校区で結成。以来3年間、孤立している親をつなごう、わが子の顔を地域の皆さんに覚えてもらおう、そして、誰もが暮らしやすいまちにしようと活動を始めました。

現在、障がい児を取り巻く福祉サービスの環境は整備されつつあり、子どもを預けることができる事業所も増えています。しかし、契約だけで事足りるという便利さを得た反面、親同士のつながりや地域の見守りという点

は、逆に失われているように感じます。そこで、お互いを知り合いながら自分の生まれ育った町の中で楽しい体験をしようと、障がいのある子どもと親が集える「おしゃべり会」や菓子作り教室、スポーツ教室などを実施。城南中と荒木中校区でも障がいがある子どもと親の会を立ち上げ、活動の輪を広げています。

今、地域も変わりつつあります。

「会の活動で、会議室を貸していただけませんか」

こう願い出ると、江南中校区にある大手靴メーカーの(株)ムーンスターや聖マリア学院大学が快諾。親子連れで店に立ち寄る度に、地域の皆さんとの距離も近くなっているように感じますし、子どもたちも少しずつ、握っていた親の手を外し、自分で歩いていこうとしています。2歩踏み出してみれば、周りに力強い応援者が次々と。これからも、マップを手にして、親子で、地域にもっと飛び出していきたいと思います。

Local login

DATA ●江南中校区・荒木中校区「地域いいねマップ」作成配布 ●江南中校区・荒木中校区・城南中校区での定例会 ●スポーツ教室in聖マリア学院大学・地域交流ランチ会・おやつ作り教室・水曜カフェ等



いいね
ウォーキング
まちにある
素敵なお店を
巡る

官民協働 — 信頼関係を築いて、次の時代を切り拓く

2000年頃から徐々に介護も障害福祉もサービス化。市民はその受け手、つまりお客様になり、「市民力」を失っているような気がします。今回、厚労省のモデル事業を進める中で、「市民力や行政力のアップとは」「協働とは」が、大事な命題でした。市職員の方々は、17・18年度の「久留米コンソーシアム」に参加、19年度は事務局メンバーに加わって企画運営。苦楽を共にして切磋琢磨し、信頼関係を築くことができましたし、この協働の姿があってこそ、次の時代を一緒に切り拓いていけると確信しました。

いち

一住民の立場として

久留米市役所 協働推進部協働推進課 清田 一樹

始めは、コンソーシアム会議に関わる人が、それぞれの立場からしか見ることができず、協働の仕方が分からずにいました。一緒に様々なプロジェクトに取り組むことで、自分の中での意識が、「行政の立場」から、一緒に考える「一住民の立場」として柔軟に考えることが出来るようになったような気がします。多世代の方との意見交換で色々な考え方があることに気づいたことや仕事だからやるという感覚ではなく、次第に自分がやりたいから楽しいからやるという感覚に変わってきました。

色々な人が掛け合わされることで、行政主催の事業では見られなかったアイデアが生まれたり、お互いの垣根を超えて共に創り上げる面白さと、またそれぞれの役割や目的が理解出来たりと、協働が進む事例になったと思います。

軸を寄せ合う

久留米市役所 健康福祉部地域福祉課 上原 敬子

コンソーシアム事務局の一年間を振り返ると、いつまでに何を決めるかということよりも、社会に必要な仕組みや意識の醸成について議論を深め合う時間でした。はじめはお互いに距離のあった事務局も、会議を重ね、次第に「関わりの中で軸を寄せ合う」^①ことができたように思います。取組みを通じ、これまで把握できていなかった社会資源が、「本業+α」という形で見出せたこと、現在の活動に至るまでの人それぞれのストーリーが周りの心を動かし、「隣人」という居心地良い関係性を作り出し、さらには循環することを実感できました。

人口減少社会や身近に起こりうる災害への備えが必要な今、今回の取組みの成果は、一人ひとりの社会資源が多面化・多機能化し、今後の支え合う活動につながっていくのではと思います。

新たに共通する価値を作る

久留米市社会福祉協議会 塚本 健治 (当時 久留米市役所 健康福祉部地域福祉課)

今回、このプロジェクトに関わり、みんなで一緒に作り上げる過程そのものに価値があることを、学ぶことができました。例えば、「^②世代力発DEN所プロジェクト」では、フリースクール利用者がカフェの運営に関わったケースや、「^③久留米10万人女子会」での、LAB会からマルシェを開催するなど、一つひとつのプロジェクトの出会いと変化が更なるプロジェクトを生み出す循環^④(ローカル ログイン循環)がありました。

この好循環が生まれたのは、互いに知恵と力を出し合いながら協働することで、新たに共通する価値を作ってきたからです。

人口減少社会の今、新たな活動や取組みを作り上げるため、多様な主体による協働で新しい価値、活動を生み出すことが重要だと思います。



行政と民間が滋賀県東近江市を視察。一緒に視て、考えることから始めた。



民間の取組みを後押ししてくれた協働推進部協働推進課と健康福祉部地域福祉課。(左から塚本さん・清田さん)



実践から見た自治力について発表。(上原さん)

※…コンソーシアムとは「共同事業体」。NPO法人、地域づくりの実践団体、大学、幼稚園、地場企業、会計事務所、法律事務所、市役所などの方が集まり、議論、地域づくりを行った。

①…5頁参照 ②…宮の陣校区内で多世代が混ざり合う場づくり ③…4頁参照 ④…4～6頁参照



「ポレポレ祭り」を支える 500人のボランティア!

2019年10月27日、「第18回ポレポレ祭り」を開催。青空の下、約5,000人の来場者で賑わいました。障がい者や子ども、大学生など、老若男女。「違い」が織りなすパワーで、「隣人時代」を創ろう!

当法人の「ポレポレ祭り」は、毎年秋に開催し、18回目を迎えました。当初、この祭りは、障がい者が、地域で生き生きと暮らすことを当たり前にしたいという思いで、町内外の隣人知人を中心に始めたもの。今では、市内外の障がい者、子ども、大学生など老若男女、約5000人の皆さんが無償ボランティアとして参画。3割の入れ替わりはあっても、7割の皆さんは常連さんです。来場された皆さんは驚いて、質問されます。「なぜ、ボランティアの数がこうも多いのですか」それは、バザーを手伝わなければ、広告協賛を出さなければと、それぞれ役割を担う意識が高いからだと思えます。しかも、上下関係のないフラットな関係。誰もが口々に、「準備から片付けまで、各人が黙々とやり遂げる。様々な人たちが力を生かし合っているのが素晴らしいし、一体感があって、感動的」と。

そして、祭りの基本は「自治」。広告・協賛金募集、バザーなどを実施しながら、100人の実行委員会のメンバーが、「人」「物」「金」を集めます。その収益は、地域の社会的活動や事業の応援に充てるという循環の仕組みも整いました。

今回も、遠方からは東北や熊本の被災地の方々が出店。再会を喜び合っています。日本で暮らす10ヶ国の外国の方々も加わりました。そこでは、誰もが「隣人」という意識。陸続き、空続きでつながり、同じ時代に生き、同じ地域課題や社会課題をもつ異世代・異業種の人たちが、祭りの当日に再会、新たな出会いも生まれています。まさに、ポレポレ祭りは、長年の積み重ねによって、人それぞれの違いが織りなすパワーをもった催しに成長しました。その力をバネにして、また一歩。「隣人時代」を推し進めていきたいと思えます。

ポレポレ祭りって?

2002年秋より開催。主催は実行委員会(保護者会、ポレポレ倶楽部、地域の保育園、小中学校、法人職員などで構成)。バザー・出店やガレージセール、ステージイベント、東北物産展、子ども企画バザーなどを実施。被災地からは、福島県南相馬市、二本松市、熊本県阿蘇郡西原村の皆さんが連続で出店。

社会福祉法人拓く

1970年代より久留米市で展開した障がい児の保護者と教員による統合教育運動が原点。2000年10月法人設立。障がい者が重くても誰もが地域で暮らすために「コミュニティづくり」に取り組んでいます。

事業所 出合いの場ポレポレ・夢工房・惣菜処ばればれ・グループホーム・居宅介護支援センター
相談支援センターカリブ・久留米市西部障害者基幹相談支援センター



拓くウェブサイト
QRコード

活動を更新中!